

---

# コードギアス AVENGER～狂王のライ～

朧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「コードギアス AVENGER～狂王のライ～

### 【著者名】

Z5407Y

### 【作者名】

朧

【あらすじ】  
ライはかつての知り合い、A・A・のお陰ですべての記憶を取り戻した。

そしてライは、ゼロの持つ【ギアス】と呼ばれる能力によって、ライは愛した部下をその手にかけた。

ライの憎しみの炎は、日を増すごとにその勢いを強めていった。

【ブラック・リベリオン】から1年。

【黒の騎士団】リーダー、ゼロが復活したのだつた。

## オリキヤラ・オリKMF紹介 未完成

ライア・ファグラーヴ

誕生日

皇暦????年?月?日  
(原作開始時、18?)

血液型

B型

身長177cm

搭乗騎

アルトゥール・アヴェンジャー

備考

アルヴァン・ファグラーヴ侯爵の義理の息子で、神聖ブリタニア帝国で帝国最強の騎士【ナイトオブラウンズ】の一人。

師でもあるノネット・エニアグラムにその実力を評価され、着実に実績を重ね、【ナイトオブラウンズ】となつた。

【ブラック・リベリオン】時には、最大の抵抗エリアだったエリア11に赴任。

【黒の騎士団】を筆頭とした、抵抗勢力の殲滅にあたつた。

だが、【黒の騎士団】との最終決戦のトウキョウ決戦において、ゼ

口の【ギアス】によつて操られた直属諜報員ティーズ・ラストリアを殺害。

かつての憎悪の気持ちを理解し、ゼロへの復讐を誓つ。

アルシェラ・イストリア

誕生日

皇曆1997年9月6日

（原作開始時、21）

血液型

A型

身長

172cm

3サイズ

92、60、86

搭乗騎

ブリュンヒルデ

備考

今は退役したが、軍人だったジョー・イストリア伯爵を父に持つ女

性。

彼女自身のKMF操縦技術は高いが、前線で戦うことは珍しい。

基本的には、補佐として動くのを得意としている。

KMFよりも、情報収集や政治的策略などの分野を得意としている。

その実力を評価し、EU方面軍からライが直属部隊の【天女騎士】ワルキューレ・ナイツへと引き抜かれる。

トウキョウ決戦においても、その指揮の才能を遺憾なく發揮し大部隊を手足のように使い勝利に貢献。

エリア11での後処理を終えた後、先に帰還していたライの後を追い【天女騎士】ワルキューレ・ナイツのメンバーと共に帰国した。

ジル・シウイリア

誕生日

皇暦2000年3月10日  
(原作開始時、18)

血液型

AB型

身長

168cm

3サイズ

89、61、83

搭乗騎

ブリュンヒルデ

備考

ギイ・シウイリア伯爵を父に持つ、一卵性双生児の双子の姉である。

実直で非常に真面目な性格をしており、何かと抱え込むことが多い。同時に、伯爵としての父の名を汚さないように血筋を常に律している部分も見受けられる。

指揮能力に長け、部隊の指揮をすることが多い。

そんな一面とは裏腹に、趣味は料理やテディベア集めといった女子らしい一面もある。

トウキョウ決戦においては、寡兵ながらも奇策を用い数の多い敵に勝利を重ねた。

エリア11での後処理を終えた後、先に帰還していたライの後を追 ワルキユーレ・ナイツい【天女騎士】のメンバーと共に帰国した。

ライの危うさを心配している。

ウル・シウェイリア

誕生日

皇曆 2000年3月10日

(原作開始時、18)

血液型

O型

身長

158cm

3サイズ

85、64、81

搭乗騎

ゲルヒルデ

備考

ギイ・シウェイリア伯爵を父に持つ、一卵性双生児の双子の妹である。

真面目な姉とは違い、イタズラ好きで自由奔放な性格をしている。

そして、戦場では姉ほど経験が高いわけではないのだが、何故かよく当たる勘を頼りに動いている節もある。

戦場では、指揮を姉に任せ、自らは前線でその力を揮う。

家族が何より大事で、その次にライが大事のこと。

それが愛情なのかどうかは、自分でもよく分かっていない様子。

トウキョウ決戦時においては、姉ジルの指揮の下で奮戦。

【黒の騎士団】 KMFを「ことじごく」撃破していった。

エリア<sup>11</sup>での後処理を終えた後、先に帰還していたライの後を追い【<sup>ワルキューレ・ナイツ</sup>天女騎士】のメンバーと共に帰国した。

セレスティア・ファグラーレーヴ

誕生日

皇曆 2001年8月29日

（原作開始時、17）

血液型

O型

身長

165cm

3サイズ

87、59、84

所属

帝都守備隊第39連隊連隊長

備考

アルヴァン・ファグラーヴ侯爵を父に持ち、ライを義兄とするブリタニア軍人。

帝都ペンドラゴン守備の任に就いており、帝都守備隊第89連隊副隊長の地位に就いている。

依然として帝都守備の任に就いており、その容姿の高さもあってか半ばアイドル化している部分も見受けられる。

本人は非常に嫌がっている。

蘭 キキョウ

誕生日

皇曆 1997年4月9日  
(原作開始時、22)

血液型

A型

身長  
171cm

3サイズ

90、63、89

搭乗騎

コーウェイン

所属

ナイトオブツー

備考

出身が日本のナンバーズ出身者だが、強さを第一に考えるブリタニアで、『ナイトオブランズ』まで上り詰めた女性。

スザクと違いブリタニアを変えようとは思っておらず、日本が負けたのも「ただ弱かつたから」と考えており日本への思い入れはほぼ皆無、ブリタニアの国は「弱肉強食」も肯定している。

戦場では敵に対して情け容赦は欠片も無く、ただ無慈悲に機戒のように寛々と敵の命を刈り取つて行く。

性格は冷静沈着で単独行動を好み、同じラウンズのメンバーとも話すことはほとんど無い。

ライをラウンズ就任時に初めて見てから、何か感じるものがあるのか、ライだけは自分から話しかけたりする。

KMF戦での実力も高いが、彼女自身の戦闘力も高い。

持ち前の高い身体能力を生かし、身体の各所に仕込んでいる暗器を  
使って戦うことを得意とする。

キキョウは味方からは『戦姫』、EJからは『冥府の鎌』の異名を  
とるほど恐れられており、その鎌で敵を「じとじとく斬る」とで有名  
である。

桔梗の花言葉は、清楚・気品。

最後に、苗字だが「蘭」でアララギと読む。

クリストフ・ハルウェン

誕生日

皇暦1988年11月27日

(原作開始時、30)

血液型

B型

身長

191cm

体重

79kg

所属  
『カリブルヌス』

備考

ハルウェン伯爵家当主でロイドの友人、KMF開発などのその筋の世界ではかなりの有名人。

ロイドの友人というだけあって、彼もおかしいところがある。「奇人のクリス」、「変人クリス」など、不名誉な単語が並んでいる。

彼が興味を惹かれるのはKMFのみ。それ以外の物には、興味を示すことはほとんど無い。

性格などにかなりの難があるが、KMF開発については文句のつけどころが無い実力の持ち主であり、ロイドも賛辞を贈るほどである。彼の開発するKMFは全てハイスペックばかりであると同時に、たいしたこともないパイロットに自らのKMFが使われることを嫌つていたため、表舞台にはほとんど出てきていない。

ラウンズの専属機関の主任に指名されたと聞くと、狂喜したらしい。ライのKMF操縦の実力も申し分なかつたため、即答で承諾。

以後は、ライの専属機関『カリブルヌス』の主任としてKMF開発のみに力を注ぐ。

ちなみに、『カリブルヌス』とはアーサー王が手にしていた名剣の名称。

英語読みだと『カリバーン』となるが、ラテン読みだと『カリブルヌス』となる。

カルライナ・イリステラ

誕生日

皇曆1991年1月24日  
(原作開始時、27)

血液型

A型

身長

159cm

体重

42kg

3サイズ

81、60、83

所属

『カリブルヌス』副主任

備考

クリスの研究所に以前から籍を置いていた女性で、クリスの助手を務めており、『カリブルヌス』の副主任も務めている。

ロイドと同等かそれ以上の変人でもある、クリスの唯一のストッパー役である。

つい数年前までは第63師団師団長で、『黄泉への使者』<sup>ハイド・メッセンジャー</sup>の異名で知られ数々の戦場を転戦としていた。

だが、突然軍を除隊すると、クリスの属する研究所で技術者として働く。理由としては、本人曰く「疲れた」とのこと。

性格は、かつての異名からは想像もつかないほどに優しい性格をしているが、キレるとあのクリスも敬語になるほど。

クリスに対しては、結構な毒舌つぶりを發揮する。

背と胸が小さいのを気にしており、これらに関係することを口にすると静かに怒りだす。

アルトウール・アヴェンジャー  
Arthur · Avenger

型式番号

RZA - 5AA

分類

ナイトオブラウンズ専用KMF

所属

ブリタニア  
ナイトオブラウンズ

製造

『カリブルヌス』

生産形態

ナイトオブファイブ専用騎

全高

4.49m

全備重量

6.89t

推進機関

ランドスピナー

武装

MVS2×2

強化型スラッシュユハーケン×4

可変式ライフル ジエノバ

(短銃、狙撃銃切り替え可)

×2

特殊装備

## ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

ライア・ファグラーヴ

備考

このKMFは、クリスがロイドと一緒に大学時代に構想していたものをベースに開発された第7世代KMF。

クリスの信条によつて一般騎士へのKMFは開発していなかつたため、小さな研究所でいた時間が長く自分の理論を研究出来る時間があつたため、大部分はクリスのオリジナルで開発されている。

ライに合わせて徹底的にチューンされており、ライの高い指揮能力と1対1に持ち込もうとする戦術に合わせられている。

そのための武装として強化型ファクトスファイアと、クリストフが改良を加えた“MVS2”、超長距離狙撃モードに切り替え可能な可変式ライフル“ジエノバ”を装備している。

超長距離、および長距離モードに変更すると銃身がこれらに合わせて変形する。このことが、遠方への射撃を可能にしている。

使用中はファクトスファイアを展開して感度を上げなければならぬため、エナジー消費が著しく上昇する。

だが、クリストフのこれまでの研究が実を結んだのか、エナジー消

費を4分の1にまで軽減することが出来た。

クリストフ個人の、「他の技術者に負けられるか」という感情により、研究資金をかなりつぎ込みサクラダイトを大量に使用。

結果的には、『ナイトオブラウンズ』全KMFの中で一番の出力を持つと同時に、遠中近の距離に対応できるオールラウンダーなKMに仕上がっている。

ユーワイン

U w a i n

型式番号 R Z A - 2 F

分類

『ナイトオブラウンズ』 KMF

所属

ブリタニア

『ナイトオブラウンズ』

製造

ナイトオブツー 専属機関 『ヴェスター』

生産形

ナイトオブツー 専用騎

全高

4・96m

全備重量

7・31t

推進機関  
ランドスピナー

武装

MVS（鎌）

MVS（隠し剣）×6

強化型スラッシュユハーケン×4

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

蘭 キキョウ

備考

キキョウの得意とする高速戦闘を実現するために、徹底的にチューンされている。

キキョウ自身、女性ラウンズでは随一の操縦技術の持ち主で、高機動戦闘によるヒットアンドアウェイを主戦法としている。

そのため、関節部分への負担を減らすために緩衝材を1・5倍ほど多く使用している。

それと同時に、騎体をギリギリまで軽くしていることも、彼女の高機動戦闘を実現する要因となっている。当然、敵の攻撃を1発でも受ければ、致命傷は免れないことは確実。

基本武装は鎌の形を取ったMVS。

予備武装として、騎体の至る所に隠し剣が仕込まれている。武装からも分かるとおり、近距離戦を得意としている。

機体力ラーは、キキョウのカラーでもある真紅で塗装。

名前の由来は円卓の騎士の1人、ゴーラ王コリエンスの息子ユーワエイン卿から。

ブリュンヒルデ

Brunhilde

型式番号

RPI - 001

分類

ワルキューレ・ナイツ

【天女騎士】専用量産KMF

製造

ブリタニア  
『カリブルヌス』

生産形態

【天女騎士】  
ワルキユーレ・ナイツ

専用カスタムKMF

全高

4.38m

全備重量

6.74t

推進機関

ランドスピナー

武装

ヴィングスコルニル  
ハドロンライフル  
スラッシュハーケン×4

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

アルシェラ・イストリア  
ジル・シウイリア

## 備考

ライ専属機関の【カリブルヌス】が、直属の【天女騎士】のために開発した、第7世代相当KMF。

このKMFは、それぞれ個性の違う【天女騎士】<sup>ワルキューレ・ナイツ</sup>の合わせるためのベース騎として開発されたヴァルトヒルデを後方支援、及び指揮に特化させた騎体。

そのため、他の【天女騎士】<sup>ワルキューレ・ナイツ</sup>の騎体より高性能のファクトスファイアを搭載しているため、レーダーのカバー範囲が1・5倍ほど広くなっている。

そのため、このKMFは指揮を得意としているアルシヨラビジルのために2騎開発されている。

さらには、当騎体には試作兵器としてハドロンを応用した武装を装備。

だが、あくまでも試作兵器のため、エナジーの消費などに大きく難を残しているため、本国への報告も含めて搭載されることとなつた。

開発したクリス本人は、将来はアルトゥールにも装備しようと考えている模様。

最後に、近接戦闘なつた際のために2本に分離可能な長剣の“ヴィングスコルニル”を装備。

普段は背中に背負つてている。

名前の由来はワルキューレの一人、ブリュンヒルデから。

ゲルヒルデ

Gerhilde

型式番号

RPI - 002

分類

【天女騎士】専用量産KMF

製造

ブリタニア  
『カリブルヌス』

生産形態

【天女騎士】専用量産KMF

全高

4.38m

全備重量

6.91t

推進機関  
ランドスピナー

武装

シュヴァンヴィルムス（ランス）

MVS2

スラッシュユハーケン × 14

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

ウル・シウイリア

マリー・カ・ソレイシイ

備考

ライ専属機関の【カリブルヌス】が、直属の【ワルキユーレ・ナイツ天女騎士】のために開発した、第7世代相当KMF。

このKMFはナイトオブワン、ビスマルク・ヴァルトシュタインの愛騎であるギャラハッドの思想を元に改良されている。ベース騎として開発されたヴァルトヒルデを、近接戦闘に特化させた騎体。

このKMFはナイトオブワン、ビスマルク・ヴァルトシュタインの愛騎であるギャラハッドの思想を元に改良されている。特筆すべきは、主武装となる巨大なランスである。

シュヴァンヴィルムスと名付けられたそのランスは、騎体の全長ほどの長さがあり、ギャラハッドの“エクスカリバー”同様、ランス

の刃部分にエネルギー流すことで攻防に優れた武器となる。

そして、武装の少なさを多少なりとも補つために、“スラッシュユハーケン”も多數を装備。

両手の指先が“スラッシュユハーケン”となつており、それによつてコツクピットを傷付けないように戦闘不能にすることも可能とし、標的の捕縛も得意としている。

なお、肉薄されての近接戦闘に備えて両腕には“ブレイズルミナス”を搭載されている。

名前の由来はワルキューレの1人、ゲルヒルデから。

ヴァルトヒルデ

Walhilde

型式番号

RPI - 000

分類

【天女騎士】専用量産KMF

製造

ブリタニア  
『カリブルヌス』

生産形態  
【天女騎士】専用カスタムKMF  
ワルキューレ・ナイツ

全高

4 . 38 m

全備重量

6 . 57 t

推進機関

ランドスピナー

武装

M V S 2 × 2

アサルトハドロン

スラッシュユハーケン × 4

特殊装備

ブレイズルミナス

乗員人数

1人

搭乗者

リーライナ・ヴエルガモン

備考

ライ専属機関の【カリブルヌス】が、直属の【ワルキーレ・ナイツ天女騎士】のために開発した、第7世代相当KMF。

このKMFは、それぞれ個性の違う【天女騎士】に合わせるためのベース騎として開発され、戦局に応じて臨機応変に戦うことが可能。

この騎体はブリュンヒルデやゲルヒルデと違い、戦局に応じ戦うことを得意としている。

そのため武装には偏りが無く、ほとんどが一般的な武装となっている。

変わっているのは、ブリュンヒルデ同様に試験装備されているハドロンを高速で撃ちだすことを可能した、“アサルトハドロン”である。

だが、この装備もブリュンヒルデ同様、将来のためのデータ収集として試験装備されている。

「スザク！！」

「ルルーシュー！！」

かつての親友は銃を向け合ひ。

その瞳の宿るは、憎しみと怒りの炎。

静まることを知らず、これらの感情は強く燃え盛る。

両者は同時に発砲した。

ルルーシュの放った銃弾はスザクのインカムに命中し、スザクの放った銃弾はルルーシュの持つ銃を弾いた。

瞬間、スザクは跳躍するとルルーシュに飛びかかった。

「あっ、ゼロ！！」

「こいつはルルーシュだ！！」

カレンが駆け寄ろうとするが、スザクはカレンへと銃だけを向ける。

「日本人を、君を利用した男だ！そんな男を護りたいのか、君は！」

スザクは、ルルーシュの胸に取り付けられた【流体サクラダイト】を強引に外すと、遠くへと投げ捨てる。

カレンは涙を流しながら踵を返し、遺跡から去つて行つた。

「ゼロを、誓を終わらせる」

地面に倒れるルルーシュを見下ろし、そう告げた。

その頃には、すでにトウキョウ政庁での戦闘も終了しており、続々と【黒の騎士団】構成員を捕虜としていた。

スザクはルルーシュを拘束すると、秘密裏にブリタニア本国へと移送。

皇帝シャルルの前に引き出した。

スザクはルルーシュを右手で床に押し付け、左手は胸の前で折り曲げられていた。

「元第17皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。久しいなあ、我が息子よ」

「貴様あ・・・！」

「【ギアス】は使わせない」

玉座に座るシャルルの薄い笑みを浮かべながら皮肉の言葉に、ルルーシュは怒りを覚え顔を持ち上げようとする。

だが、すぐにスザクによつて再び床に押し付けられる。

「恐れながら、申し上げます。陛下、自分を帝国最強の十一騎士【ナイトオブランズ】にお加えください」

「ゼロを捕らえた褒美を寄越せと？」

本来であれば、不敬ですぐに首を刎ねられても文句は言えない発言。

一軍人であり、ナンバーズでもあるスザクの言葉。

「調子」そ「寧だが、簡単に言えば褒美を要求しているに過ぎない。

「お前……！」

「言つたはすだよ、ルルーシュ。俺は、中からこの世界を変えると  
「友達を売つて出世するのか！」

「そうだ」

ルルーシュの問いに、スザクはハツキリと肯定の言葉を返した。

その答えに、ルルーシュは思わず目を見開き驚きを露わにする。

「良かねつ。今の答え、気に入った。では、【ナイトオブラウンズ】  
に命じる。ゼロの左眼を塞げ」

「Yes, your majesty

シャルルは立ち上がりながら、ラウンズの一員となつたスザクに命じる。

スザクは右手でルルーシュの身体を無理矢理起こし、左手の掌で左眼を塞いだ。

「皇子でありながら反旗を翻した不肖の息子。だが、まだ使い道はある」「な、何を……」「記憶を書き換える。ゼロである」と、マリアンヌの」と、ナナリ

ーのこと

「まさか、【ギアス】！？」

目前まで近付いてきたシャルルの瞳を見て、ルルーシュは気付いた。

シャルルの両目に、【ギアス】の翅が浮かんでいるのを。

シャルルもルルーシュと同じ、【ギアス】能力者。

「すべてを忘れ、只人となるがよい」

「やめろ！また俺から奪うつもりか！母さんを、ナナリーまで！！」

「シャルル・ジ・ブリタニアが刻む」

「やめろおー！ー！」

「新たなる偽りの記憶を」

「只人：普通の人、ありきたりな人の意」

ルルーシュは必死に身体を動かして抵抗を試みるが、スザクは決して放すことはなく拘束している。

ルルーシュの制止も空しく、シャルルは両手を大きく広げシャルルの【ギアス】が発動される。

ナナリーを忘れ、母マリアンヌを忘れ、ゼロであつたことを忘れ去つたルルーシュ。

ルルーシュが気絶すると、シャルルは踵を返し再び玉座に腰を下ろす。

「『苦労だつたな、枢木スザクよ。叙任式は後日、改めて執り行う。

貴様には、7の数字を『える』  
「はつ、ありがとうございます」

その時、玉座の間の扉が開くと誰かがやつて来たようだつた。

「？」

玉座の間は明かりが点けられていない。

電気が点けられているのは、シャルル周辺だけだ。

そのため、入り口周辺はハツキリ見えない。

玉座の間に響くのは、靴音のみ。

「・・・・・」

だが、シャルルだけは入つて來た人物が誰か分かっているようだつた。

その証拠に、その口元には笑みが浮かんでいる。

そしてついに、ようやく誰か分かつた瞬間、スザクの背筋に寒気が走る。

「一。」

姿を見せたのは、黒衣に身を包んだライだつた。

以前、ライが纏つっていたのは蒼のマントだつた。

だが、今はどじうこいつわけか黒のマントだった。

同時に、スザクは感じた。

以前会つた時とは、別人じゃないかと思つぽだつた。

ライの全身から發せられる威圧感、眼つきの鋭さ。

今のライは、研ぎ澄ませれた抜き身の刀のようだつた。

「ライか。何用だ」

「ゼロの素顔を見に来ただけだ」

ライは横たわるルルーシュを足蹴にして仰向けて、顔を確認する。

「ふん。やはり、ゼロはルルーシュか。……殺しておくれべきだつたか」

氣絶するルルーシュを見て、ライはそう呟き捨てた。

「ほう、氣付いていたのか」

「察しついていた。だが、甘かつたようだ

「…」

シャルルの問いに素つ氣なく答えると、ライはルルーシュを睨み付けると横顔を思いつ切り踏みつけた。

氣絶してこるとほいえ、ルルーシュの表情が苦悶に変わる。

以前のライでは考えられなかつた行動に、スザクは言葉を失つた。

「本当に、せつせと殺すべきだつた。わざわざ【ギアス】で記憶を書き換えたんだ。ルルーシュを何に使つもつだ」

ライはルルーシュを踏みつけながら、シャルルへと視線を移し問いかける。

ライの口調に、今まで黙つていたスザクが口を挟んだ。

「ライ！陛下に向かつて！それに、どうして【ギアス】のことを…」「黙れ。私はシャルルと話している。貴様とは話していない」

「つ！」

だが、ライの睨みによつてスザクも思わず口を閉ざす。

「枢木よ、ライは良い。わしが許可したのだ」

「…・・・Y e s , y o u r m a j e s t y

シャルルの言葉によつて、スザクは渋々ながらも引き下がつた。

「ルルーシュの使い道だつたな。撒き餌に使つだけよ。ただの魚ではなく、極上のものを捕らえるためのな」

ライの問いに、シャルルはそう答えた。

誰を誘き出すのかは知らないが、シャルルの狙いに関係することなのだから、ライは直感した。

「・・・ならば、その後に殺すとしよう。用は済んだ。私は失礼する」

ライはルルーシュから足をビサると、踵を返して玉座の間を後にする。

「枢木よ、貴様も下がれ。ルルーシュのことは我々でやる」

「Yes, your majesty」

シャルルはスザクにも退出するよう命じると、スザクは命令通り部屋を後にして。

そしてスザクは、前を歩いているライを呼び止めた。

「ライ

ライは足を止めると、振り返りスザクを見る。

「何の用だ

「えつ、それは・・・・

ライにやつされ、スザクは口ごもった。

無論、聞きたいことがあった。

その変わつよひについて、何故【ギアス】を知っているのかを。

だが、ライの感情の無い瞳に見据えられ、言葉が出て来なかつた。

「・・・・スザク、すまなかつたな」

「えつ？」

スザクがどうしたものかと悩んでいると、突然ライが謝ってきた。

謝られる覚えのないスザクは混乱してしまつ。

「アヴァロンからトウキョウ租界に向けて出撃した時、別れ際に言つたことを覚えているか」

「覚えてるよ。憎しみに支配されるな。怒りは力となるが、憎しみは滅びの道、だつたね」

「今となつては、言つたことを後悔している」

ライはそう自嘲気味に咳くと、ライの唇の端が釣り上がる。

「！」

そのライの笑みを見た瞬間、スザクの額に冷や汗が浮かぶ。

「（何て、冷たい笑み……）」

「今のは、これほどまでに憎しみに満ちてこると言つて」

「ライ……」

スザクは、ライの瞳に垣間見えた憎しみに気付いた。

ライは止めていた足を動かし、再び1人歩きだした。

「ライ…どうして、【ギアス】のことを…」

「私も【ギアス】を持つているからだ」

「…」

「ライの背中越しの言葉に、スザクは田を見開いて驚いた。

「ライ、それって！」

「それより、会にに行つたりどうだ？」

「？」

そう言われても、スザクにブリタニア本国に知り合にならぬはない。

だが、ライのその次に発せられる言葉にスザクは再び驚愕する」となる。

「ナナリーは本国に居る」

「なつ！」

「首都ネオウェルズにある、ベリアル宮にな」

「どうして、ナナリーが！」

「その問い合わせたければ、シャルルに聞け。私は勅命に従つたま

でだ」

ライは立ち止まる」ともなく、歩きながらスザクにそう告げ去つて行つてしまつた。

「どうして、ナナリーがブリタニア本国に・・・。ライがトウキヨウ決戦の時に居なくなつたのも、そのためか

スザクは、徐々に遠くなつていくライの背を見ながら呟くのだった。

今回は、スザクがルルーシュを捕らえて、シャルルと謁見したすぐ後です。

つまり、トウキョウ決戦からそれほど時間は経っていません。

そして狂王となっているライ。

かなり変わっています。

ルルーシュのファンには申し訳ないです。

ライの怒りを表現したかったのと、スザクにライが変わったことをよく理解させるためです。

恐らく、原作開始前までの数話は更新します。

原作突入時になると、更新はややストップ。

ストックを作った後、更新を再開すると思います。

数日後、ライは自ら車を運転しある場所に向かっていた。

ラウンズであるライならば、運転手ぐらいは付いても不思議ではない。

さらば、ライはファグラーヴ侯爵家の人間だ。

だが、ライはそれを断り、自ら運転することにしている。

ライが向かったのは、【カリブルヌス】の研究所である。

クリスやカルラを始めとした【カリブルヌス】のメンバーは、トウキョウ決戦後に本国に帰還してきた。

その後、エリア11に向かう前に本国で使用していた研究所は破棄し、大きめの研究施設に移ることになった。

アルトウールだけなら問題無かったが、【天女騎士】のKMFもあるため移動したのだ。

ライは【カリブルヌス】に到着すると、【カリブルヌス】の新研究所に足を踏み入れた。

ライは研究所の奥に進みながら、他のメンバーからの挨拶に応えていく。

ライは奥へと進むと、左右に並ぶ【天女騎士】<sup>ワルキューレ・ナイツ</sup>の乗るKMFを見な

がら、最奥にあるアルトウールの前に立つ。

「あー、ライちゃん。来てたのね」

「おはよう」ざこます、ライさん」

奥でアルトウールの調整をしていたクリスとカルラも、ようやくライに気が付いた。

クリスはいつもと変わらぬ様子で、カルラは頭を下げて挨拶した。

ライはアルトウールを見上げながら、クリスに問う。

「クリス、アルトウールの改良作業はどうだ」

「今のところは、順調よん」

「“輻射波動”は？」

「あれをアルトウールに装備するのは難しいわねん。データで見たあの騎体、紅蓮だったかしら？あの騎体とアルトウールとは、そもそも思想が違うもの」

確かに、思想は大幅に違う。

紅蓮は武装からも分かる通り、近接戦闘を主眼に置き“輻射波動”が最大の武器となっている。

だが、アルトウールは違う。

アルトウールは近距離、中距離、場合によつては遠距離からでも戦えるように設計されている。

もし“輻射波動”を装備したら、アルトウールの各所に齟齬が生じ

る可能性が出て来る。

装備するなり、一から造る必要がある。

「なるほどな」

「“輻射波動”を装備するのは無理だけど、“ジェノバ”的弾を“輻射波動”にしようかと思つてゐるわ」

「可能なのか?」

「時間はかかると思つたが、可能だと思つわ」

「さうか」

クリスの言葉にライは素つ氣なく答えると、突然クリスがクネクネと身体を揺らし始めた。

「それにしても困ったのは、装備したいものが多すぎる」とねん。“ハドロン砲”も装備したいし、【ドルイドシステム】も搭載したいのよねん。【ゲフィオンディスターバー】を応用したら、ステルス機能につながるはず。や～だわ～、楽しみでビンビンになっちゃうわ～

「（何が・・・いや、聞くのは止めよう。とんだやぶ蛇になりそうだ）」

腰を左右に動かしながら回転するといつ奇怪な動きをするクリスから離れ、ライは【天女騎士】<sup>ワルキューレ・ナイツ</sup>のKMFの整備をしているカルラに付いて行く。

「カルラ、そちらはどうだ?」

「はい、『報告します。まず、全騎士【フロートゴニット】の装備は完了。ですが、予算の都合上、ライさんに搭載されたものと比べやや質が落ちてしましました』

「5騎分だからな。それは仕方ないか」

「はい。それと、ライさんのアルトゥールも含めて全KMFの出力を上げました」

「クリスは言ってなかつたが？」  
「興奮して忘れているんでしょう」

そう言って、2人はクリスへと視線を移した。

そこには、相変わらず自分の世界に入ってしまっているクリスがいた。

腰の左右運動に前後運動が加わり、先程の奇怪な行動がパワーアップしていた。

見てはいけないものを見てしまった2人だった。

2人だけでなく、【カリブルヌス】のメンバー全員がクリスを視界に入れないように努力していた。

「それで、アルトゥールは他に何が変わったんだ？」

「他には、胸部・両脚部にも【ブレイズルミナス】を追加装備しました。各所の【ブレイズルミナス】を稼働させれば、錐体状の騎体を覆う【コアルミナスコーン】となります」  
「防御力が上がったか」

2人はあの状態のクリスを見てしまったことを激しく後悔しつつも、話を続ける。

クリスのストッパーであるカルラも、さすがにあの状態のクリスには手を出さないらしい。

「【天女騎士】<sup>【フルキュー・ナイス】</sup>に試験装備されていた、“ハドロン砲”関連の武装も完成。これで、以前のように激しいエナジー消費は解消されたと思います」

「順調だな」

「全体的にはそうです。ですがやはり、最終的にはアルトゥールの改良作業に時間が掛かると思います。当分は、出撃は無理ですね」

「そうか。私から皇帝陛下に申し上げておく」

ライはしばらくカルラと話した後、【カリブルヌス】の研究所を後にした。

クリスはとうとう、ライが出て行くまで戻って来ることはなかつた。

クリスが我に返つたのは、キレたカルラが蹴り飛ばしたからだつた。

ライは【カリブルヌス】から、ラウンズがよく集まるラウンジに向かつた。

ラウンズがよく集まると書つても、実質的にはラウンズ専用の部屋になつてしまつている（以後、専用部屋）。

専用部屋に入ると、そこには数人のラウンズがいた。

アーニャにジノ、キキヨウとノネットがいた。

「おっ、ライじゃないか。久し振りだな

「ああ

ノネットの言葉に素つ気なく返す。

ライは部屋に備え付けられている「コーヒーメーカーから、コーヒーを紙コップに注ぐ。

コーヒーの入った紙コップを持ち、ライは椅子に腰を下ろし懐から本を取り出した。

ちなみに、コーヒーはブラックだ。

「そうだ。ライ、聞いたか？」

「何のことだ？」

「今度、新しいラウンズが任命されるそうだ。ヴァルト・シュタイン卿によると、キキョウと同じナンバーズ出身者みたいなのだが」

そう言いながらノネットは、隅に座つて読書をしているキキョウへと視線を移す。

隅と言つても、それほど距離は無いため聞こえているだらう。

だが、そんなことに欠片も興味はないキキョウは、本から目を離さない。

ちなみに、キキョウが読んでいる本は「男を落とす100の捷」という本だ。

ノネットたちからは、本のタイトルは見えないため気付いていない。

キキョウが飲むのは、激甘のカフュラテだ。

「知っている。名前は枢木 シザク。元日本国首相の息子だ」

「よく知ってるな、ライ」

「エリア11で会ったからな」

「そういえば、ライはエリア11に居たんだつたな」

ライは本に視線を落としながら言った。

スラスラと本人の情報が出てくるライに、ジノが驚きの声を上げる。

「それで、そいつの実力はどうなんだ？」

「どちらかといえば、高い部類に入るだろ。甘いところはあるが

な

「へえ・・・・。楽しみだな」

ライから返ってきた答えに、ジノは笑みを浮かべた。

「ジノ。御前試合の相手、志願するつもり？」

今までブログ更新で忙しく、黙っていたアーニャが顔を上げジノに問う。

「ああ。面白そうじゃないか」

「ふーん」

「アーニャは？」

「興味無い」

アーニャの視線は再び携帯へと向けられており、ジノへの答えは非

常に素つ氣ないものだつた。

「ノネットはどうだ？」

「私が？ そうだな。興味はあるが、今回はジノに譲るわ」

「珍しいな。ノネットがそんなことを言つなんて」

「残念ながら、私はEJへの派遣が決まつてゐる。叙任式に出席したら、すぐにEJだ」

現在、EJ戦線にはラウンズとしてモニカが派遣されている。

だが最近、EJが近日中に大増援を派遣するという情報を、情報部が入手したのだ。

それが本当ならば、モニカ一人では厳しいだつと云つことで新たにノネットの派遣が決定したのだ。

「なるほどな。EJも必死だな」

「それはそうだらう。それに、噂では最近白ロシア戦線もキナ臭いつて話だ。近いうちに、誰か派遣されるかもしれんな」

ノネットは思い出したように云つた。

白ロシア戦線。

その名の通り、ロシア方面で争つてゐる戦線だ。

こちらも、増援が派遣されるのではないかとの噂がある。

もしそれが本当なら、EJ方面だけではなくこちら側にもラウンズを派遣することになるだらう。

「恐らく、スザクを派遣することになるだろ？」「どうしてだ、ライ」

「スザクはナンバーズだ。皇帝陛下が承認したとはいえ、他の貴族や軍人共は面白くないだろう。スザクの実力を示すためには、必要なことだ」

「そういえば、私とアーニャもラウンズに就任してすぐEJに派遣されたな」

ナンバーズは区別するというのは、ブリタニアの国是だ。

貴族や軍人には、よりそれが顕著になつて来るだろ？

ナンバーズに対する激しいまでの嫌悪感。

スザクのユーフェニアの騎士叙任の際にも、それがよく現れていた。

周囲の人間を黙らせるためには、やはり力を見せつける必要がある。自分たちより上の力を見せつければ、奴らもおとなしくなることだろ？

表面的には、だが。

「それに、すでにラウンズには同じナンバーズのキキヨウがいる。見下しているナンバーズが、ラウンズにまた入るかもしれないんだ。風当たりは当分強いだろう」

「やれやれ、バカな貴族や軍人には分からんさ。ラウンズは力こそがすべてだ。力があれば、ブリタニアでは上に行ける」

「まあそれはともかく、私は枢木との対戦が楽しみだよ」

せりに続けるライの言葉に、ノネットは険しい表情で呟いた。

ノネットは、ライよりラウンズとしての期間が長い。

当然、キキョウがラウンズに就任した時の貴族たちの反応を良く知つてゐることだらう。

だが、そんなことは微塵も気にしていなかつたキキョウは、ついひい貴族を睨むことで黙らせて見せた。

そのことを思い出したのか、ノネットは急に笑い始める。

「あいつらの顔、傑作だつたよ。お前たちにも見せてやりたいくらいだ」

「キキョウの御前試合は、誰とだつたんだ？」

「ドロテアだつたな。結果的にはキキョウが勝つたんだが、キキョウに負けたことで認めたんだらう。以前よりは、態度も柔らかくなつたよ」

ライ以外の視線がキキョウへと向けられる。

だが、そこにキキョウは居なかつた。

と思ひきや、新しくコーヒーを注いでいるよひだつた。

恐らく、驚くほど砂糖を入れてゐるのだらう。

「ライは、前線に出ないのか？」

「KMFは改良作業中だ。当分は無理とのじだ」

「なるほどな」

ライは時間を確認すると、本を閉じ立ち上がった。

「そろそろ私は失礼する」

ライは残っていたコーヒーを一気に流し込むと、紙コップをゴミ箱に放り込むと専用部屋を出て行つた。

キキョウ side

私はわずかに視線を上げ、部屋を後にするライの背を見送る。

以前会つた時は違つ、今のライ。

別人と思つくらいだ。

鋭い目つき、人を威圧するような雰囲気、口調も変わつたように感じる。

マントの色も、黒に変えたらしい。

「なあ、ノネット」

「何だ」

「ライに何があつたんだ?さすがに変わりすぎだろ。別人と思つたくらいだ、私は」

私がライについて考えていると、Hニアグラムとヴァインベルグも同じことを話し始めた。

「アーニャもそう思うだろ?」

「私も、そう思つ。(でも、あれはあれでカッコいいかも)」

Hニアグラムに続き、アールストレイムにも問い合わせるヴァインベルグ。

アールストレイムの頬が赤くなつたのは、私の氣のせいだらうか。

「マントの色まで変えたみたいだしな」

「ライによると、今の私に蒼は似合わない、だそうだ」

「どういう意味だ」

「さあな。だが、あれほど変わつたんだ。余程のことがあつたのだ

「うひ

ライのすべてを覚えるほどの、余程のことか。

「キキヨウはどうだ?」

「知らない」

Hニアグラムが私に心当たりを聞いてくるが、残念ながら無い。

「まあ、現時点では私たちに出来ることは無いな。ライが言つてくれるのを待つくらいだな」

「まあ、そつなんだけどな」

確かに、私たちこほどいすれども出来ない。

問い合わせた感じで、答えてくれるとは思えない。

けど、やっぱり気になる。

……私も帰ろう。

私はカフュラテを飲み干すと、本を閉じ立ち上がる。

「帰るのか、キキョウ？」

「ああ」

私は空になつた紙コップをゴミ箱へと投げる。

だが、外れてしまった。

「……」

チラッと振り向くと、ヒーラグラムがニヤッと笑みを浮かべていた。  
ヴァインベルグとアールストレイムは、背を向けていたので見られていないうだ。

「（恥ずかしそぎる……）」

私は入らなかつた紙コップを拾い、ちゃんとゴミ箱に入れその場を足早に立ち去つた。

キキョウ side end

ライは車を運転し、帰宅した。

屋敷の中に入ると、出迎えた執事やメイドたちに挨拶を返しながら自室へと歩いて行く。

自室のベッドには、A・A・が横になっていた。

ライは、A・A・が部屋に居ることは気にする「」ともなく、部屋の中に足を踏み入れる。

マントをハンガーに掛け、クローゼットへ。

白の騎士服と下も脱ぐと、同じよつとしてクローゼットへと仕舞つ。

代わりに、ライは黒の私服を身に纏う。

「私が部屋に居るんだから、少しは恥ずかしそうにするとかしないか？」

「何の用だ」

A・A・の問いは無視し、ライは用件を問い合わせる。

本国に来てから、A・A・はライと行動を共にするようになった。

A・A・に家などあるはずもないのに、必然的にファグラーヴ家の屋敷に住んでいる。

その時は両親から、主に父親がやけに興奮して質問してきた。

だが、ライが完全無視をすることで肩を落として諦めていた。

ライは踵を返すと、部屋に備え付けられている「コーヒー・メーカーへと歩いて行く。

カップを手に取り、コーヒーを注いでいく。

「大丈夫かなと思ってね」

「何がだ」

「・・・・あなたの心が」

「・・・・・」

A・A・の咳きに、ライの「コーヒーを注ぐ手が止まる。

「・・・・どういう意味だ」

「そのままの意味。復讐をしたところで、彼女は」

「死人は何も思わない、感じない。死人が何かを感じる。そんなものは幻想だ。私は、私のためにゼロを殺す」

ライはコーヒーをカップへと注ぎ終わると、テラスへと歩いて行く。

A・A・はベッドから下りると、テラスに出たライを追いかける。

「・・・・・」

「ルルーシュは必ず、いつか記憶を取り戻すだろう。シャルルの計画のためには、ルルーシュに【ギアス】を【えた女、C・C・が必要らしいからな

「計画つて?」

テラスに出たA・A・は、眼下に見える庭を見るライに問いかける。

眼下の庭では、本国へと移つたヴィレッタがストレッチをしていた。

「シャルルの計画など、どうでもいい。問題のは、ルルーシュが記憶を取り戻しそれとして再び立つかどうかだ。いや、ルルーシュなら必ず立つ。ナナリーを取り戻すためにな」

「その時に、目的を果たすと言つこと?」

「そうだ。その時に、私は奴を殺す」

ライが口にした、殺すの言葉と同時にライの口つきが鋭くなる。

「やうだとしても、まだまだ先のことだらうがな。今は、その時のために牙を研ぐとしよう」

ライはフッと笑みを浮かべると、再び部屋の中へと戻つていく。

今はまだ準備期間。

憎きルルーシュを討つため、ライはその牙を極限まで研ぎ続ける。

「まつたく、待ち遠しいな。ルルーシュ」

## Episode - 1 牙（後書き）

お待たせしました、更新です。

今回は久々のキャラと、キキョウの登場です。

そして、クリスがやつちやつてます。

書いてて楽しいキャラではあるが、さすがにキツイか。

訳の分からぬ回だったら、申し訳ないです。

それはともかく、以前R2を最初から見直していたときのことです。

R2の1話で、バニー姿のカレンが登場。

その時思いました。

カレンはルルーシュに渡さねえ、と。

かといって、ライとくつつくわけではないのじゃー承を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5407y/>

コードギアス AVENGER～狂王のライ～

2011年11月24日13時58分発行